

「わたしがあなたがたを癒すことができるように、……悔い改めなさい」

十二使徒定員会

ニール・L・アンダーセン長老

悔い改めへの呼びかけが厳しい非難の声であることはまれです。むしろ、向き直って、神に「再び立ち返りなさい」という愛ある願いなのです。

兄弟姉妹、十二使徒定員会への召しを受けてから6か月になります。長年模範として、また教師として仰いできた人たちとともに現在自分が奉仕していると思うと、今でもとても謙虚な気持ちになります。皆さんの祈りと支持に心から感謝します。召されて以来、心を込めて祈り、主に受け入れていただけるよう懇願してきました。神聖で、忘れることのできない方法で主の愛を感じてきました。救い主が生きておられ、この業が主の聖なる業であることを証します。

主の預言者トーマス・S・モンソン大管長を愛しています。今年の4月にわたしを召したときに大管長が見せてくれた優しさを永遠に忘れないでしょう。面接が終わると、両手を広げてわたしを包み込んでくれました。背の高い大管長が、その長い手で抱き寄せてくれたとき、まるで愛情深い父親に抱き締められ、守られている幼い少年のような気持ちになりました。

この経験から数か月間、わたしは、御自身のみもとに来て、霊的な意味で御腕に抱かれるようにという主の呼びかけについて考えてきました。主は言われました。「見よ、わたしの憐れみの腕はあなたがたに向けて伸べられている。わたしは来る者をだれでも受け入れよう。わたしのもとに来る者は幸いである。」1

聖文において主の御腕は、広げ2、伸べられ3、伸ばし4、抱かれる5と書き表されているほか、強い6、聖なる7、憐れみの御腕8、腕に……保護する9、愛の腕10、「終日、……伸べている」11といった言葉でも表現されています。

わたしたちは一人一人、霊的な意味で主の御腕に抱かれるという感覚をある程度知っています。主の赦し、主の愛、主の慰めを感じたことがあるのです。主はこう言われました。「わたしがあなたがたを慰める者である。」12

わたしたちがみもとに来て御腕に抱かれるようにという主の望みは、悔い改めへの招きという形で表されることが多くあります。「見よ、主はすべての人を招き、憐れみの御腕を伸べて、『悔い改めよ。そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れよう』と言われる。」13

人は罪を犯すと神に背を向けますが、悔い改めるとき、向き直って神に立ち返るのです。

悔い改めへの呼びかけが厳しい非難の声であることはまれです。むしろ、向き直って、神に「再び立ち返りなさい」という愛ある願いなのです。14 これは、愛ある御父と御父の独り子からの招きです。今以上の自分になり、さらに高い生き方を手に入れ、変わり、戒めを守ることで得られる喜びを味わうようにという招

きなのです。キリストの弟子であるわたしたちは、悔い改めのもたらす祝福と、赦されることで得られる幸せを知り、喜んでいます。この喜びはわたしたちの一部となり、考え方や感じ方に大きな影響を及ぼしています。

この大会の説教に耳を傾けている何万という人々のふさわしさや義の程度は一人一人異なります。それでも、悔い改めはわたしたち全員にとって祝福です。だれもが罪を赦されることによって、救い主の憐れみの御腕を感じる必要があります。

何年も前のことですが、ある男性と面接をするよう依頼されたことがあります。ずっと以前に、したい放題な生活を送った経験を持つ人でした。悪い選びをした結果、教会の会員資格を失いました。その後教会に戻り、戒めを忠実に守るようになってから長い年月がたっているにもかかわらず、過去の行いのために絶えず心を痛めていました。会ってみると、この男性が一時期の間聖約を破ったことに恥辱と深い自責の念を抱いているのを感じました。面接の後で、わたしはこの男性の頭に手を置き、神権の祝福を与えました。言葉を発する前に、救い主がこの人を愛し、赦しておられるという強烈な感覚を覚えました。祝福の後、わたしたちは抱き合いました。男性は声を上げて泣きました。

わたしは、どれほど利己的な罪を犯したとしても、救い主が悔い改める人を憐れみの御腕をもって抱き締め、愛されることに驚嘆しています。救い主がわたしたちの罪をお赦しになれること、そしてぜひとも赦そうとしておられることを証します。完全な福音を知った後で滅びを選んだごく少数の人の罪を除き、赦されない罪はないのです。15 わたしたちのだれもが罪に背を向けて、キリストのみもとに来ることができるとは何とすばらしい特権でしょう。心の中から罪の意識と痛みを取り去り、代わりに喜びと良心の安らぎを与えてくれる神の赦しは、福音の最も甘い実の一つです。イエスは高らかにこう言われました。「わたしがあなたがたを癒すことができるように、今あなたがたはわたしに立ち返り、自分の罪を悔い改め、心を改めようとしているか。」16

今日、耳を傾けている皆さんの中には、重大な罪に立ち向かうために「心の中〔の〕大きな変化」17 が必要な人がいるかもしれません。神権指導者の助けが必要になることもあるでしょう。ですが、多くの人の場合、悔い改めは、必要とされる変化を起こせるよう主の助けを求めながら、静かに、自分の中で、毎日行っていくものです。

ほとんどの人にとって、悔い改めは一度きりの出来事ではありません。それは旅のように続きます。悔い改めは簡単ではありません。変わるといえるのは大変なことなのです。逆風に立ち向かい、流れに逆らって泳ぐことが必要です。イエスは言われました。「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。」18 悔い改めとは、不正直、高慢、怒り、不純な思いといったことに背を向け、それらとは違う、親切、無私、心、忍耐、霊性といったことに目を向けることです。それは向き直って、「再び神に立ち返る」ということなのです。

特に何について熱心に悔い改めるべきかを知るには、どうすればよいでしょうか。愛する人や友人から変わるべき点を指摘されると、内面にある、生まれながらの

自分が頭をもたげ、このように言い返してしまうことがあります。「わたしが変わるべきだと言うんだね。それなら、あなたの欠点について言ってあげようか。」これよりも良い方法は、へりくだって主に願うことです。「父よ、わたしがどうするのがよいとお思いですか」と祈るなら答えが得られます。自分の何を変えたらよいのかを感じるようになります。主は、わたしたちの思い、そして心に告げてくださるのです。19

続いて、わたしたちに選ぶ機会が与えられます。わたしたちは悔い改めるでしょうか、それとも用意された天の祝福を自ら拒むのでしょうか。

アルマは警告しました。「どんなささいなことでも罪の言い訳をしようとしてはならない。」20 「祝福を自ら拒む」とき、人は、変わるよう招く霊的な声を信頼することをやめてしまいます。祈りはしても、耳を傾けることが少なくなるのです。そのような祈りには、悔い改めを生じる信仰が欠けています。22

それでもこんなふうにする人がいるかもしれません。「アンダーセン兄弟、あなたは分かっています。わたしがどんな思いをしてきたか、あなたには分からないのです。変わるなんて無理です。」

確かにそのとおりです。わたしはすべてを理解してはいません。しかし、すべてを理解している方がいらっしゃいます。その御方は御存じです。あなたの苦しみを経験しておられます。その御方は「わたしは、たなごころにあなたを彫り刻んだ」22 と宣言されました。救い主は確かに存在し、手を差し伸べ、わたしたち一人一人に「わたしのもとに来〔なさい〕」23 と命じておられます。悔い改めは可能です。わたしたちは悔い改めることができるのです。

変わるべき点が分かると、自らが引き起こした悲しみを嘆くようになります。このような嘆きを経験すると、誠意を込めて心から主に告白し、必要な場合には当事者にも告白するようになります。24 可能な場合、傷つけた人に償い、傷つけたものや取ってしまったものを回復します。

悔い改めは日々の生活の一部になります。毎週聖餐を取ることはとても大切です。柔和になり、謙遜になって主の御前に行き、主に頼っていることを認め、主から赦しを受けて新たな者としてくださるよう求め、常に主を覚えることを約束することはとても大切なのです。

悔い改め、キリストのようになろうとする日々の努力の中で、時々、自分がいつも同じ問題で苦労していると感じることがあります。木が生い茂った山を登るときと同じで、頂上に近づいて高い尾根から振り返るまで、どれほど進んだか実感できないことがあるのです。がっかりしないでください。努力して悔い改めているのであれば、あなたは悔い改めの道を歩んでいるのです。

成長するにつれて、人生をよりはっきりと見据え、聖霊がより力強く働きかけてくださるのを感じるようになります。

わたしたちは時々、なぜ遠い昔に捨てた罪の記憶を忘れられないのかと思うことがあります。悔い改めた後でも、犯した間違いを悲しみ続けることがあるのはなぜでしょう。

ジェームズ・E・ファウスト管長が語った心温まる話を思い出してください。「わたしは小さな少年のとき、……祖母……が熱いまきコンロでおいしい食事を作っていたことを思い出します。コンロの横のまきを入れた箱が空になると、祖母は黙ってその箱を取り上げて出て行き、外に積んである杉のまきを詰めて、重くなった箱を家の中に運び込みました。」

ここまでくるとファウスト管長は感情が高まって声を詰まらせ、そして話を続けました。「わたしはとても無神経で……した。そこに座って、愛する祖母がまきの箱を運ぶのをただ見ていたのです。わたしは自分が恥ずかしく、怠惰であった〔罪〕をそれ以来ずっと後悔してきました。いつの日か、祖母に赦しを求めることができると願っています。」 25

65 年以上も前の経験でした。それでも、祖母を手伝わなかったことをファウスト管長はまだ覚えていて、ずっと悔やんでいたのです。そうだとしたら、わたしたちの中で、忘れられずに悔やんでいることがあったとしても、驚くことはありません。

聖文には、わたしたちが死すべき世で捨てた罪を忘れるだろうとは書いてありません。そうではなく、主がお忘れになると書かれているのです。 26

罪を捨てるとは、二度と行わないことです。捨てるには時間がかかります。罪を捨てることができるよう、時に主は、犯した間違いのわずかな残りをわたしたちの記憶の中に置いておかれることがあるのです。 27 それは、この世での学びの中で非常に大切な部分なのです。

正直に罪を告白し、傷つけた人にできるかぎり償い、戒めを守ることによって罪を捨てる時、わたしたちは罪の赦しを受けるための道を歩んでいます。時とともに、悲しみによる苦悩は和らぎ、わたしたちの「心から罪〔が〕取り除〔かれ〕」 28、「良心の安らぎ」 29 が与えられるでしょう。

真に悔い改めたにもかかわらず安らぎを得られないように感じて、戒めを守り続けてください。主がよいと思われるときに安らぎが与えられることをわたしは約束します。癒しには時間もかかるのです。

不安のある人は、ビショップに相談してください。ビショップは識別の力を持っています。 30 あなたを助けてくれるでしょう。

聖文は「悔い改めの日を引き延ばすことがないように」 31 と警告しています。しかし、この世において悔い改めに遅過ぎるということはないのです。

わたしはあるとき、教会に戻ろうとしている年配の夫婦と面接するよう言われました。二人とも両親から福音を教えられていたのですが、結婚してから教会を離

れてしまいました。それから 50 年たって戻って来たのです。夫が酸素ボンベを引きながらわたしの部屋に入って来たのを覚えています。二人は忠実でいられなかったことを悔いていると言いました。わたしは戻って来てくれてうれしく思っていることを伝え、悔い改める人を主は必ず喜んで受け入れてくださると伝えました。すると、年老いた夫はこう答えました。「それは分かっているんです、アンダーセン兄弟。しかし、わたしたちの悲しみは、子供と孫が福音の祝福にあずかっていないということなのです。わたしたちは戻りましたが、孫や子供はそばにいないのです。」

この夫婦は二人きりで戻ったわけではありません。悔い改めが生む変化は当人のみにとどまりません。祝福は家族にも、愛する人たちにも注がれます。義にかなった悔い改めをするなら、主がよいと思われるときに、救い主は御手を伸べてわたしたちを包むだけでなく、子供や子孫の人生をも包んでくださるのです。悔い改める人には、必ず、よりすばらしい幸せが訪れます。

救い主はわたしたちを罪から解放することがおできになると証します。わたしには主の贖いの力を自ら実感した経験があります。主の癒しの御手が世界中の何千もの人々のうえにあるのを、紛れもなくこの目で見てきました。主の神聖な賜物がわたしたちの心から罪を取り除き、良心に安らぎを与えてくれることを証します。

主はわたしたちを愛しておられます。わたしたちは主の教会の会員です。主は、わたしたち一人一人に、悔い改め、罪に背を向け、みもとに来よう招いておられます。主が生きておられることをイエス・キリストの御名によって証します、アーメン。

v37

注

1. 3 ニーフアイ 9 : 14
2. モルモン 6 : 17 参照
3. アルマ 19 : 36 参照
4. 列王下 17 : 36 ; 詩篇 136 : 12 参照
5. 2 ニーフアイ 1 : 15 参照
6. 教義と聖約 123 : 6 参照
7. 3 ニーフアイ 20 : 35 参照
8. アルマ 5 : 33 参照
9. アルマ 34 : 16 参照
10. 教義と聖約 6 : 20 参照
11. 2 ニーフアイ 28 : 32
12. 2 ニーフアイ 8 : 12
13. アルマ 5 : 33
14. ヒラマン 7 : 17 参照
15. ボイド・K・パッカー「輝かしい救いの朝」『聖徒の道』1996年1月号, 20 参照
16. 3 ニーフアイ 9 : 13

17. アルマ 5 : 12
18. マタイ 16 : 24
19. 教義と聖約 8 : 2 参照
20. アルマ 42 : 30
21. アルマ 34 : 17-18 参照
22. イザヤ 49 : 16
23. 3 ニーフアイ 9 : 14
24. 教義と聖約 58 : 43 参照
25. ジェームズ・E・ファウスト 「律法の中でもっと重要な、公平と憐れみと忠実」 『聖徒の道』 1998年1月号, 65 参照
26. 教義と聖約 58 : 42-43。アルマ 36 : 17-19 も参照
27. ディーター・F・ウークトドルフ 「帰還可能点」 『リアホナ』 2007年5月号, 99参照
28. アルマ 24 : 10
29. モーサヤ 4 : 3。聖文は、この世と次の世でのわたしたちの幸せを、良心の安らぎと結びつけている。喜びの反対は良心の呵責であるというアルマの教えに注意する（アルマ 29 : 5 参照）。ほかの預言者たちは、この世の後で訪れる悪人の苦痛を、その人たちの感じる罪悪罪と関連付けている（モーサヤ 2 : 38 ; 3 : 24-25 ; 2 ニーフアイ 9 : 14, 46 ; モルモン 9 : 5 参照）。ジョセフ・スミスはこう述べている。「人は自分で自分を苦しめ、罪に定める。だからこそ、彼らは火と硫黄の燃える池に入ると言われるのである。人の思いにある失意という苦しみは、火と硫黄の燃える池と同じくらい激しいものである。」（History of the Church, 第6巻, 314）
30. 教義と聖約 46 : 27 参照
31. アルマ 34 : 33